

新たな世界で起きた新たな戦争

ロシアのウクライナ侵攻の報に接して、私は最初「白黒映画の時代ではあるまいし」と思った。確かに東部ドンバス地域などで地上戦が展開され、塹壕ざんごうが掘りめぐらされているさまは古い戦争映画のシーンのようだ。また、軍事侵攻し占領した領土の一方的な併合を宣言するなどはいかにも古典的だ。

しかし、この新しい戦争はやはり変化する新しい世界で起きているものなのだ。

イラク戦争によってアメリカの威信が大きく傷つき、国力も影響力も落ち込む中で、欧

米主導だった国際社会の力関係はこの20年間で大きく変化し、グローバル・サウスの存在感が高まる、より多極化した新しい世界が出現している。西側であれ、グローバル・ノースであれ、「北」の理屈や世界観、利益を「南」に押しつけることはもはやできなくなっている。ウクライナ侵攻はこの「大きな変化」を白日の下にさらしたという点でも歴史的だといえそう。

それは大航海時代から植民地主義に乗り出し、産業革命を経て世界を武力や経済力で支配してきた西洋中心の世界の終焉しゆうえんを意味していると言ってもいいかもしれない。である以上、我々に問われていることは明確だ。それはこの新しい世界における真の国際連帯を構築できるかどうかということだ。それをもってでしか、ロシアによる軍事侵攻という暴挙を食い止めることはできないだろう。

かみ合っていない世界の現状認識はどうなっているのか、そして、お互いが対立する相手をパラレル・ワールドにいると非難するような分断の時代を乗り越えることはできるのか。そのためにはどうしたらよいのか。その答えを求めて、ウクライナやアフリカそれぞれの現場を走り出した。双方のリアルをつぶさに見ていく。そこから何かが浮かび上がり、何かがつかめるかもしれない。いや、つかまえねばならない。

覚悟していた通り、あの「問答無用の緊張感」にさらされる日々が始まった。

*人物の年齢・肩書、データの数字などは基本的に取材当時のものです。